

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：31201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520316

研究課題名(和文)ヘンリー・ソローの教育哲学における「円」、「成長」および「自由」

研究課題名(英文)"Circle," "Growth," and "Freedom" in Henry Thoreau's Educational Philosophy

研究代表者

小野 美知子(Ono, Michiko)

岩手医科大学・共通教育センター・准教授

研究者番号：20326698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間内に実施した、ヘンリー・ソローの教育哲学に関する研究及びその成果として挙げることができるのは、子供の頃にソローが経営する学校の生徒でもあった、ルイザ・メイ・オルコットのソロー観、他の哲学者たちとの比較においてソローの自由と教育に関する見解を論じた"Thoreau and Freedom"、「成長」との関連における四季の循環の意義についての論文の三編、および2013年に音羽書房鶴見書店から出版された、ソローの教育哲学と自然観察に関する著書、Henry D. Thoreau: His Educational Philosophy and Observation of Natureである。

研究成果の概要(英文)：As the result of my study on Thoreau's educational philosophy during the past three years, I wrote and published three papers: "Thoreau as Seen by Louisa May Alcott" in Japanese, "Thoreau and Freedom" in English, and "The Significance of the Cycle of the Seasons in Relation to 'Growth'" in Japanese. These papers are included in the collections of academic papers published by the societies to which I belong: The Thoreau Society of Japan and The American Literature Society of Japan in Tohoku. Also, I published a book in English titled Henry D. Thoreau: His Educational Philosophy and Observation of Nature. This was published from Otowa-shobo Tsurumi-shoten in 2013. It has five parts: Prologue, Thoreau as Teacher and His Personality, Thoreau's Views on Nature and Art, Thoreau's Views on the Seasons, and Epilogue. It focuses on how his views on education are influenced by his observations of nature and how he valued adult education as well as teaching his students.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ソローの教育哲学 自然 成長 自由

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、コロンビア大学大学院修士課程で TESOL を専攻し、進歩的な教授法に触れたことを機に、19 世紀当時としてはきわめて革新的であったソローの教育哲学に対して強い研究意欲を抱くに至った。それ以来、教育者としてのソローを中心に研究を続けており、博士論文および 20 編を超える論文の中で扱ったテーマは、ソローの教育哲学を中心に、自然、芸術、四季に関する彼の考察、ブロンソン・オルコット (Bronson Alcott)、ルイザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott) 父娘の記述から得られるソロー像、先住民の教育観との比較研究などである。ソローの自然観に関しては、自然現象として夕日、虹、風などに焦点を当て、芸術に関しては、美術批評家のジョン・ラスキン (John Ruskin) や建築家のフランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright)、またゲーテの『色彩論』との関連においては、ニュートン、および量子力学の権威ハイゼンベルク、ハイトラを援用した。四季の循環については、「円」に対するソローの考察も取り入れた。本研究における計画は、これまでの研究を踏まえ、「生徒の心を知的に、道徳的に自由にする」ことを目標とし、また「自由の哲学者」とも呼ばれたソローの教育哲学の分析を中心として研究を深め、「自由」、「成長」、および「円」に関する彼の思想を詳細に明らかにすることである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ヘンリー・ソローの思想が独特の教育哲学として解釈され得ることを、『日記』等の資料の広範かつ詳細な分析により証明することである。従来のソロー研究は、主として『ウォールデン』やエッセイを中心に、彼を超絶主義者、政治批判者、博物学者として解釈することに重点が置かれてきた。しかし、ソローの思想の根源には、人間の成長が自然との接触に深く影響されるという自然主義的教育思想があることは明らかである。自然と教育の相互関係という視点から、彼の著作活動の全体を包括的に分析することによってはじめて、ソローを真に革新的な、超時代的な著述家として、19 世紀アメリカ文学史・思想史の中に正当に位置づけることが可能になる。

ヘンリー・ソローと自然に関しては、アメリカ文学史上初の自然解説者、環境保護論者、測量技師、あるいは地形学者としての観点から多くの研究が行われてきた一方で、教育者としての側面、特に彼の教育哲学と自然観察との関係に焦点を当てた研究はほとんど見られない。教師としてのソローについては、わずかに伝記の中で言及されるのみである。しかしながら、その教育哲学は、日々の自然観察と、短期間ではあったが、ハーヴァード大学卒業後に自ら経営する学校で教えた経験とから生まれたものであり、彼の哲学の基

盤をなすと同時に、彼の人生と文筆活動において不可欠の部分となっている。実践に基づく彼の教育理念が、ジョン・デューイ (John Dewey) よりも半世紀以上先んじていたことは注目に値する。

ソローは 1852 年 4 月 18 日付けの『日記』に「一年が円であることがこの春に初めてわかった」と記し、さらにその 8 年後には「自然が毎年繰り返すことを知るには何年もかかる」と述べている。彼の『日記』には「円」あるいはその表象が繰り返し見られ、また「円」は『ウォールデン』(Walden) の構成上のイメージでもある。しかしながら、「円」はまた人を閉じ込める性質を持ち、チャールズ・アンダーソン (Charles R. Anderson) は、ソローが 2 年間の森の生活の後にウォールデンを去ったことを「自然の循環」からの脱出であると解釈する。それを「円」に対して「直線」ととらえるなら、『ウォールデン』最終章における一連の示唆もまた、上へ向かう直線ととらえることができる。さらにそれは「成長」を象徴し、「円」からの「自由」をも想起させる。厳しい冬のさなかに長時間リギダマツの年輪の調査を続けたことが、ソローの致命的な病を引き起こしたことを考慮すると、「円」に対するソローの深い思いが想像される。研究期間内の目標は、ソローが自然との関わりの中でとらえた「円」の意義をさらに探求し、それが、彼の教育哲学における「成長」および「自由」の問題とどのような関連性を持っているかということ、明らかにすることである。

ソローは、その死後に出版された、ラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson)、ジェームズ・ラッセル・ローウェル (James Russell Lowell)、ロバート・ルイス・スティーブンソン (Robert Louis Stevenson) による批判的なソロー論のため、60 年以上にわたり、誤った人物像が人々の心に刻まれることとなった。その人物像とは、社会に対して否定的な態度を取る「厳格な禁欲主義者」、狭量な知性と人格の持ち主、などであるが、このような印象が強く残り、固定化したため、エマソンの息子エドワードその他の友人たちの主張も長い間顧みられることがなかった。しかし、このような誤ったソロー像は、14 巻の『日記』を含む全集の刊行などにより、近年大きく修正されてきた。『日記』などの資料から浮かび上がるソローの実像は、人は自然により自然の中で最も良く教育されるという信念のもと、人それぞれの能力に合った成長を尊重し、自己を信頼して自立した個人になる手助けのためには、労を惜しまないというものである。本研究は、修正されたソロー像の実像の根幹に彼の教育哲学を措定して研究対象とし、彼の思想全体の本質を解明しようとする点で、他に類例のないものである。

最近のソロー批判における主要な論点は、「物理的価値 vs. 精神的価値」、「哲学 vs. 実用

主義」、「個人主義 vs. 社会的責任」、「孤立 vs. 社会的関与」等であると言われ、対立する概念が議論の対象になりがちである。また、一つのテーマを研究対象とし、そのみが個別に論じられることもある。しかしながら、ソローの哲学の根底には教育哲学があり、それは生涯続けられた日々の自然観察に基づいているのである。このことを前提として、ソローの教育哲学をその根源から研究・解明することは、彼の思想全体の包括的な理解につながる事が十分に期待される。

19世紀の思想を背景に、「円」、自然との関わりにおける人間の「成長」、および「自由」についてのソローの考えをより深く理解し、解明することは、彼の哲学をこれまでとは別の角度から解釈することを可能にするであろう。また、すでに多くの研究者によって論じられている「自然」に対する彼の見方にも、新たな光が投げられ、ソローの自然解釈に新局面を切り開く可能性が大きい。さらに、先見性のある、超時代的な教育をおこなったソローの教育理念の根底にあったものの解明を通じて、現在の学校教育に対しても新たな視点を提供できるはずである。ソローの経営する学校が、「自由」と「個人」と「実際の経験」を重視して大成功した事実を考慮すると、本研究から得られる結果は、文学研究を超えた意義を持ち得るのである。

3. 研究の方法

本研究では、目的を達成するためにテーマを三つに絞り、ソローの思想における「円」の意義、自然との接触による人間の「成長」および「自由」という三項目について、意義と相互関係を探究し、明らかになったことを、彼の教育哲学との関連において論ずる計画である。研究資料としては、ソローの『日記』、その他の著書、およびソローに関する批評を中心に、上記のテーマについて論じている古今東西の文献を参考にする。方法としては、各テーマをキーワードとして、一項目ごとに順に取り組む予定である。生涯にわたって教育に関心を持ち続けたソローの教育哲学の根底には「自然」と「道徳」があったと言われ、またその教育の目的は、創造的思考力を知的にまた道徳的に自由にすることであったと言われる。彼にとって教育の真の目的は何であったのかを、本研究を通してより深く理解し、解明できれば幸いである。

平成23年度は、「円」の意義、および三次元においてそれに相当する「球」の意義を、主にソローの『日記』と諸作品に焦点を当てて研究し、それが彼の教育哲学とどのような関連性を持つかを探究する。この二つの形状に関しては、古代ギリシャ哲学やドイツ哲学などの歴史的思想を背景に、「螺旋」や「楕円」との関連も考慮に入れながら、その中にソローが見ていたものは何か、について論じる。

リチャード・トゥアーク (Richard Tuerk)

は、『ウォールデン』の主要なテーマの一つは「成長」であり、それは「円形の拡張」によって起こると主張しながらも、「円」のイメージが含有する制限、限界、固定のいずれにも満足しなかったソローの、「成長する可能性のヴィジョン」がその最終章の「直線的」イメージに表れていると指摘する。このような観点から、「円」と上向きの直線により象徴的に表される「成長」は、ソロー哲学において、深い関係があると思われる。ソローは個々の生徒がそれぞれの能力に応じて、自然な方法で成長することを望んだ。このことを考慮に入れ、本研究の第一段階としては、『ウォールデン』最終章に見られる「成長」の可能性の意義に触れながら、ソローが自然界、あるいは宇宙に見た「円」および「球」の概念を中心に考究する。

平成24年度は、前年度に引き続き、「成長」および「自由」というテーマについて、ソローの教育哲学との関連において探究する。ソローは毎年繰り返される草の成長を「永遠の若さの象徴」と呼んだ。それは、草が夏に土から芽を出して伸び、冬の霜に成長を阻止されても、再びその緑の葉の先端を永遠の方向へ押し上げるからである。デイヴィッド・グリーン (David Greene) はその著書の中で、「成長の表象的パターン」は、開花や季節における再生に見られるように、「垂直線」であるという見方を示し、それはまた空間的なモチーフの一部であって、「垂直運動」や「上向きの広がり」を表すと述べている。さらに、ソローにとっては、人間の存在において「垂直線」が重要であるとし、地球上のどこにしよう、人間の精神的成長は、この線に沿って宇宙の星々の方向へ、無限と永遠に向かって着実に進むべきであると、主張する。このように垂直方向へ進むことは、規則性からの脱却、「円」からの脱出を含有し、それは「自由」との関連を示唆する。

平成25年度は、「自由」に関して、ソローの『日記』および諸作品における記述を中心に、他の哲学者や思想家の見解を参考にしながら理解を深めて行く。このテーマに関しては、エマソンやゲーテ、プラトン、カントに加え、マーガレット・フルー (Margaret Fuller) やルイザ・メイ・オルコットの研究も考えている。ソローは、1837年12月30日にオレステス・ブラウンソン (Orestes Brownson) に宛てた手紙の中で、教育に関する真摯な意見を述べ、それに続けて、彼の考える「自由」の意味を、次のように説明している。「人間の本質と釣り合った自由 自分が人間の中の人間であり、自身がその小さな一部である、あの理性に対してのみ自己の考えと行動に責任があると感じさせる自由。」教師としてソローは、何よりもまず、生徒の創造的思考力を自由にし、その成長と発達を妨げるような、型にはまった考えから生徒を自由にしたいと願った。そしてまた「個人の成長の過程」としての教育の概念を尊重し、

人は草木のように、それぞれの成長のしかた、成長の時期があると信じた。したがって、「自由に曲がりくねって流れる川を、まっすぐな溝にしてしまう」当時の教育には反対であった。ソローは、「自分で考える自由」、「自分の芸術作品を創造する自由」、「自分の人生を生きる自由」に加え、「特定の才能を伸ばす自由」を挙げているが、これは、彼の教育の目的が、生徒が自らの能力を十分に伸ばし、自分なりの成長をする手助けをすることであったことを想起させる。そのために彼が実行したのが、戸外での「実践による学習」および「自然研究」であり、それらは生徒の自主性、自立性を養うよう工夫されていた。フィリップ・カファロ(Philip Cafaro)は、『ウォールデン』において「自由(freedom)」は「自立(independence)」と同義であると指摘している。

本研究では、「円」、「成長」、「自由」という三つの概念とソローの教育哲学との関係を解明し、理解を深めるために、彼の『日記』および諸作品からの引用、種々の文献、ホラス・マン(Horace Man)の年次報告を含む19世紀の教育事情や思想などを参考にしながら、ソローの教育哲学と、上記の三概念との関係を解明し、理解を深めることが目標である。仮に研究が当初の計画通りに進まないとしても、各テーマの研究結果は、将来の研究における新しい局面の発展につながると確信する。

4. 研究成果

(1) 平成23年度は震災の影響もあり、思うように研究が進まなかったが、平成24年度には「ルイザ・メイ・オルコットのソロー観」というタイトルの日本語の論文が、日本ソロー学会発行の論文集に含まれた。この論文集は『ソローとアメリカ精神 米文学の源流を求めて』という題名で、「ヘンリー・ソロー没後150周年記念論集」として2012年10月に金星堂から出版された。

ルイザ・メイ・オルコットは、子供の頃に、ソローのもとで自然について学んでほしいという父の意向で、短期間であったが、姉とともにソローの経営する学校で学んだことがある。オルコットの作品にはソローをモデルとする人物が登場し、生徒の立場から彼女が見た教師としてのソロー像が、深い洞察力を持って、生き生きと描かれている。

(2) 平成25年度には研究の成果として、247ページにおよぶ英文の著書と、英語論文、および日本語論文を発表した。著書のタイトルはHenry D. Thoreau: His Educational Philosophy and Observation of Nature(ソローの教育哲学と自然観察)で、2013年8月に音羽書房鶴見書店から出版された。全体は、Part I: Prologue、Part II: Thoreau as Teacher and His Personality、Part III: Thoreau's Views on Nature and Art、Part IV: Thoreau's Views on the Seasons、Part

V: Epilogueの5部から成る。ソローの教育哲学は自然観察から得たものがその根底にあり、彼は人間の成長は自然との接触に深く影響されると信じていた。本書は、ソローの教育哲学の解明と、彼の生涯教育への思いを重視して論じている。

(3) 英語論文のタイトルは“Thoreau and Freedom”で、2013年9月に、日本ソロー学会発行の『ヘンリー・ソロー研究論集第39号』に掲載された。この論文はソローの『日記』および諸作品から「自由」についての彼の見解を引用し、カント、デカルト、エマソン、シモーヌ・ヴェイユ、ジョン・デューイ、エーリッヒ・フロム、ジョン・ステュアート・ミル、アンリ・ベルグソンなど、主に西洋の思想史に残る哲学者たちの見解と比較しながら、ソローにとって真の自由とは何か、を論じている。

(4) 日本語論文のタイトルは「『成長』との関連における四季の循環の意義」で、2014年3月に、日本アメリカ文学会東北支部発行の『東北アメリカ文学研究No. 37』に掲載された。この論文は、長年にわたり自然観察を続けたソローの、四季の循環と「成長」に関する考察に焦点を当て、四季の循環が円に象徴されるのに対して、「成長」は、スウェーデンボルグが描くような螺旋の可能性もあるが、やはり直線によって表され得ること、さらに、「円」と「直線」との関係および、両者がソローにとってどのような意味を持っていたかについて論じている。内容は英文拙著Part IVの一部と重複することから、「寄稿論文」となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

小野美知子、Thoreau and Freedom、ヘンリー・ソロー研究論集、査読有、第39号、2013、23-32

小野美知子、「成長」との関連における四季の循環の意義、東北アメリカ文学研究、査読無、第37号、2013、102-113

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 2件)

小倉いずみ 他、金星堂出版、ソローとアメリカ精神 米文学の源流を求めて(ヘンリー・ソロー没後150周年記念論集)日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開促進費学術図書(課題番号245042)、2012、361

小野美知子、音羽書房鶴見書店出版、Henry D. Thoreau: His Educational Philosophy and Observation of Nature、2013、247

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野美知子 (ONO, Michiko)
岩手医科大学・共通教育センター・准教授
研究者番号：20326698

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：